



# 内装や設備 特性に配慮

パーキンソン病対象有料老人ホーム 倉敷に開業

パーキンソン病患者を対象にした住宅型有料老人ホーム「PDレジデンス倉敷」が今月、倉敷市石見町にお目見えした。川崎医科大、川崎医療福祉大が、パーキンソン病特有の症状を踏まえ、内装やリハビリプログラムなどを監修した。(二羽俊次)

パーキンソン病患者専用の住宅型有料老人ホーム。脳神経内科クリニックを併設している



ゆったりとくつろげる居室



## 川崎医科大など監修 クリニック併設



リハビリルーム。歩行の目安になるようフロアは格子状にデザインされている

嚥下機能に応じて食事は4種類を用意する



居室のトイレ。足を運ぶ目安になるよう床に足形を付けた

施設(鉄筋5階)は個室57室(各約19平方メートル)を設けた。各戸にエアコン、洗面台、ナースコールを設置。足がすくんで踏み出しにくいという特性に配慮し、希望者にはトイレの床に足形の模様を描き、順に踏んでいけば腰掛けられるように工夫する。

風呂はリフト付きの一人用バススタブ、リクライニングチェア、シャワーベッドを設けた。大阪市を拠点に訪問看護事業などを営む「フィロソフィア」が運営する。入居の問い合わせは専用フリーダイヤル(0120-763676)。

## 自宅でリハビリ習慣づけ

川崎医科大・三原主任教授

倉敷市に開設されたパーキンソン病患者専用の住宅型有料老人ホームは、川崎医科大、川崎医療福祉大が全面的に監修し、患者の身体機能の維持向上と暮らしやすさを追求したのが特徴といえる。川崎医科大神経内科学の三原雅史主任教授にパーキンソン病の症状、患者目線に立って助言した内容を語ってもらった。

パーキンソン病患者は全国で15万~20万人いるとされ、高齢化に伴い増えている。進行性の病気で徐々に体の動きが遅くなるため、リハビリを習慣づけることが極めて重要だ。



リハビリは通常、介護保険に基づき自宅への訪問や施設への通所によって行われているが、週に1、2日程度では不十分だ。どうすれば自宅で自発的に取り組んでもらえるか、医師や理学療法士らがもっと関わる方法はないのかと自問していた。そういう状況の中で、一人でも多くの患者さんが活動性を維持できればと思い、監修の依頼を引き受けた。

パーキンソン病の人はバランスが悪い、動きが小さい、姿勢が崩れやすいといったハンディがあるので、それを改善できるリハビリメニューを提案し

た。腰が曲がった人が多いので、手すりやエレベーター、照明などのボタンの位置を通常より低くした。リハビリルームの床は格子状にして、継ぎ目を目安に足を運べば歩行しやすいようにした。

運動能力などに関する検査データを定期的に検証し、一人一人にとって最適のリハビリを研究する。それを大学の臨床や研究にも生かしていく。学術的にもメリットは大きいであろう。

治療は基本的に薬物治療とリハビリを併用して行う。一部の患者さんには脳外科手術も行われる。手術や薬によって症状を抑制できるが、進行を完全に止めることはできない。画期的な新薬の開発が世界的に進められている。